

## 荒木 講師 通信

(昭和11年9月26日 Baltimore ヨリ発信)

前略このダンデーといふ人は米國腦外科學界でも特殊な存在で Ventriculography を始めとしてこの人の創意になる面白い手術が随分澤山あり、それに手術の手際(これはクツシング流とは非常に違ふと思ひます)も非常に鮮かですが、どうも人格的に缺陷のある人らしく、米國では孤立の状態にあり、他所の腦外科學者一般から非常に嫌はれてゐるやうです。本人はこれは自分が偉いので他の奴が嫉妬するのだと、平氣なものです、必ずしもそうではなく、我々如き外國の旅行者に對しても、クツシングやその弟子達の随分ひどい惡口を放言したり又他の學者の所説をうけ入れるのに非常に頑迷だつたりしますので皆に惡く思はれるのでせう。

然し腦外科學者としては偉い人でこの人の論文の別刷集といふのが圖書館にありますので見ますと今日迄に原著として發表された論文が千三、四百頁もあり仲々いい仕事をしてゐます。この人のやり方は單に手術を見るだけでは充分に理解出來ませんので、圖書館で上記の別刷集を読んで見ました。手術を見る片手間です。主なものに皆讀むのに1ヶ月あまりかかりましたが、これでこの人のやる事、考へてゐる事が略完全に了解出來たと思つてゐます。言葉が不充分で細かい質問が出來ず、又向ふでやつてくれる説明が完全に聞きとれませんので、どうしてもその人が從來發表した論文をよむ他に、理解を充分ならしめる方法はあります。

今後はこの方法で行きたいと思ひ目下クツシングの論文を圖書館で讀んでゐます。この圖書館(William Welch's medical Library)は病院のすぐ傍にあり吾々に對しても本や雑誌の貸出しを自由にしてくれますので、非常に助かります。今私は米國滞在中に從來米國で發表された主な腦外科の論文を皆讀破りたいと發心して一生懸命に讀んでゐます。無論手術の見學が第一ですからその餘暇にやつてゐるのです。

ダンデーは旅行其他で時々休みますし、又8,9月は手術の少ない月だそうで、思つた程多數の手術を見ることが出來ないのは残念であります。もうこの土地へ來て殆んど2ヶ月になりますので、ダンデーのやり方について詳細な御報告をしたいのですが、未だダンデー獨特の手術で見てゐないものが少くありませんので、もう1ヶ月見學の上御報告します。今度は紐育からの報告と違つて、文献をよく讀みましたので、より學術的な、誰に示しても恥しくない御報告が出來ると思つて居ります。中田教授の話に聞いたダンデーのやり方と、實際のやり方及び論文に書いてゐるやり方乃至考へとは多少違ひます。1ヶ月位唯見學してもその人の真相がわからない事をこれで痛感しました。どうしても其人の論文を讀まなければ駄目だと痛感しました。この様に手術を見る他に論文を讀むといふ事にすれば1ヶ所に2,3ヶ月も居れば先づ正しい理解に達する事が出來ると思ひますので、よく人の云ふ『あまりあちこち動き廻らないで、1ヶ所にちつとして充分に見學した方がよい』といふ風にしないで、それよりも多くの人の遠

つたやり方を數多く見學する方が得策の様に思つて居ります。

ダンデーの所には目下東大青山外科の近藤君(次繁博士の息)と一緒に居ますので、2人で仲よく勉強してゐます。日本人が2人も來て永く見學するといふ前例はなかつたものと見え、ダンデー非常に得意で、非常に親切に教へてくれます。この土地には10月末迄滞在の豫定に致して居ります。それからフィラデルフィアで1ヶ月位グラントの手術を見たいと思ひます。グラントは先月死亡したフレジアの後繼者で、この人の名前は私日本に居る時から知つてゐました。こちらに參りましてからわかつたのですが米國の腦外科の主流は矢張りクツシング流で、現在米國の神經外科醫の大部分はその弟子でありますが、クツシング流以外に、ニウヨークのエルスバーク、フィラデルフィアのフレジアの系統があり、それにこのダンデー(この人はやはりもとはクツシングの弟子ですが現在は全くクツシングから離れた独自の立場にあります。寧ろクツシングの正反對の立場の様です)といふのが主な分野であります。メイヨのアドソンはフレジアの弟子であります。従つて私はこの4つの流儀を十分に理解したいと思つてゐます。

クツシングは *Enderteritis obliterans* で歩行が不充分ですので自ら手術がやれませんが、クツシングのやり方はクツシングの最も長い間の助手であつて目下その後繼者としてポストンの教授をしてゐるホラツクスのところで見られると思ひ、私はそこで最も多くの時間(12月から明年4月迄位)を費したいと思ひます。それからニユーヘブンへ行つてクツシングに會つて色々な疑問を質し且つ「ニユーヘブン・ホスピタル」の腦手術を2ヶ月位見學したいと豫定してゐます。ニユーヘブンではクツシング自ら手術はしませんが、手術の指圖や監督はしてゐるやうですから。

私が日本を發つ前に英語の會話を教はつた「エンヂニア」の老人がニユーヘブンでクツシングに會つて私の事を傳へましたら、クツシングが是非來るやうに、待つてゐるからと云つたそうですが、右様の次第でクツシングの所は最後にした方がよいと考へてゐます(その頃は言葉がもつと上手になつてゐませうから充分な質問も出来るでせうし、向ふの説明もよくわかるでせう)。

とにかく私は臨床一點張りで、今迄あまりにおくれて仕舞つた日本の腦外科を何とか米國並にやれる所迄引き上げたいと一意意願して精進をつづけてゐます。勉強してゐる中に段々自分の腦外科に對する眼が開けてくる様な氣がして愉快に堪へません。私は少しも努力して勉強してはゐません。面白くて堪らなくて勉強してゐます。面白くてやる勉強で身體を毀すことはないと思つてゐます。私はこの機會に米國にやつて戴いた事を深く深く感謝致してゐます。今來てよかつたといつても感じてゐます。日本の醫學界が腦外科に理解のないことは遺憾ですけれども、それももとはと云へば外科學者のその方面への努力の足りなかつた結果で、他人を恨むわけには行かないと思ひます。

米國の腦外科を見れば心が躍ります。どうか私歸朝しましたら、何んとかして飯が食へて腦外科に専心出来るやうにと願つてゐます。歸朝してから飯が食へるかどうかといふ事が一寸氣懸りですけれども何んとかして腦外科の爲に盡したいと念じてゐます。

今の調子で行けば明年6月迄に米國の腦外科を略充分にのみ込めるだらうと思ひます。それから歐洲へ行き、主として巴里の腦外科を見學し暮に歸朝致したいと考へてゐます。後略